

クレティアン・ド・トロワ作（オウイディウスの原作による）

## 『フィロメーナ』 II

天沢 退二郎訳

### 目次

物語本文・続き（58～1498行）

《訳注》（20）～（27）

《解説》

《ビブリオグラフィ》

前回 I 目次

《解題》

物語本文（1～737行）

《訳注》（1）～（19）

〔悪王テレウスは、妃の妹にあたる乙女フィロメーナに邪恋を抱き、まんまと船に乗せて連れ出し、トラキアの、人里離れたところにある自分の持ち家へとみちびく。近くには街道も小径もない——ここまで前回分〕

この間、いかにもさりげなく

あれこれと話しながら、企らみを秘めて

男は乙女を家へいざなった。

そして中へ入り

乙女とテレウス、二人きりになったのを

見たり聞いたりする者は誰もいない。

悪を企らんだ男は

乙女の右手を取って引き寄せる

一体どういふことか、乙女にはわからない  
気付きもしないのだ、この男が

自分をあざむこうとして、

やさしく抱き、接吻するのだとは。

まことに、ならず者が、思いのままに

悪事を実行しようとするときは、

その結果どうなるかと構いやしない。

悪事をなすということは、

それをあえてする者には甘美な欲びであり、

誠実で賢明な貴人にとつては、

じつにもう苦く酷いむじ思いがするものだ。

しかしこの男、善良さも気品も優しさもなく

ただ、悪者であり、卑劣、残忍であり

悪の本能を解き放つときは

その心のおもむくままに

悪の限りを尽さずにはられないのだ、

——いったん悪をなすと心を決めた以上は、

そのくせ、まずは宮廷風の流儀に倣つて

相手の愛を求めるふりを、無理矢理に

暴力をふるう前に、やってみせる——

《美しいひとよ、わかたてほしい》(6)

私はそなたを愛している、だからお願いだ

745

私と仲良しになっておくれ、

そしてこのことは人に知られぬように、

もし長くこの仲を続けたいと思うなら》

《知られぬように？ なぜ？

わたくしは然るべく貴方を愛しているけれど、

隠しておきたいなどと思つていませんわ。

でも、もしわたくしのことを

邪よこしまな愛の名でお求めになるのでしたら

おやめ下さいまし、その気はございません》

《やめる？ そなたこそ、そんな言い方はやめてほしい！

私はそなたを愛し、いたく気に入つておるゆえ、

ぜひ同意してもらいたい、

私がそなたへの思いを遂とどげること》

《何ですつて？ それこそ自分を辱しめることよ！

神さまは決して、貴方とわたくしの間に、

そんな不実をお許しになりません！

わたくしの姉のことを、お考えになつて。

姉は貴方の、れつきとしたお妃おきですよ。

その姉に對して、不義をはたらくのはいやですし、

たとえ力づくでされるのではなくても

姉に不快な思いをさせるのはいやです》

《いやだと？》《はい》《では誓おう、

いまやそなたは私のものゆえ、

私はそなたを思い通りにする

そなたが良いと言おうがいやだと言おうが、

そなたは身を護ろうとしても無駄だ、

私はすべて、思うがままにやつてのける》

《本当に？》《もちろん、今すぐにだ、

誰が覗き見しようが、かまわぬ

盗み見などは、恐れはせぬぞ》

そしてテレウスは暴虐をふるい、

乙女は叫んで逆らい、身をもがく。

恐怖のあまり、今にも死にそうだ。

怒りと、苦しみ、苦痛のために

百遍以上も顔色を変え

ふるえ、蒼白になり、汗にまみれ、

思うことは、生れ育った故国を

出て来たのが本当に不運だった、

それでこんなひどい辱めに遇うなんて。

《ああ！ と乙女は叫ぶ、卑劣なけだもの

卑劣な強慾者、何が望みなのか？

卑劣な悪漢、卑劣なケダモノ、

卑劣な裏切者、卑劣な誓言破り

邪悪な卑劣漢、卑劣な無法者、

卑劣にもあんな、王様に誓ったわね？

この乙女御を、町重にお連れします

810

805

800

795

王様のところへ

健に、お返ししますすつて

誓ったわね、それを裏切るなんて！

裏切者、父はそんなあんたを信用して、

あんたの裏切りなど、思いも及ばずに。

それもあんたが目の前で泣いたりして、

さも誠実に約束したからよ、

あんたの信じるすべての神々に誓ってなどと。

神様はどこにいるの？ 信心はどうなったの？

あんた、みんな忘れてしまったの？

あの涙はどこへ行ったの？ 父の前で

あんたの目から出てきたあの涙は？

ああ！ なぜわからなかったんだらう

あんたのごまかしが、裏切りが？

卑劣漢、なぜこんなひどいことをするのか？

こんなふうに、血迷って、乱暴するなんて。

後悔しなさいよ、それが賢明というものよ、

まだ後悔が間に合ううちに、

誓約破りをせず、嘘をつかずにね！》

こうして、哀れな、悲傷の乙女は

男に後悔するよう懇願するが、

そんな言葉は、この男には通じない。

委細構わず乙女に襲いかかり

835

830

825

820

815

無理強いに攻め立てて

全くの力づくで乙女を征服し

思う存分に欲望を達したのだった。

諺ことわざにいみじくも言う、《悪はつねに次の悪を呼び、

それによっておのれを養う》と。

そして、悪あくしき養分は、

必らず悪しき結果をもたらす。

テレウスは、まだその悪行の途上にあつて

さらに次なる罪を犯さねばならない。

鋭利な小刀を手にとると、考えた――

乙女が誰かに出会つて

この屈辱を暴露したり

告発したりすることのできぬよう、

乙女の口の中の舌を

この場で切断してやろう

そうすれば自分の罪は永遠に葬られる、と。

一度不幸が見舞うと、一度ではすまない。

テレウスは乙女の舌を引張り出すと

そのおよそ半分を切断する。

これは、先の悪業に重ねて

じつに酷い仕打ちであつた。

乙女はそのまま廢屋に閉じこめられ、

泣いては叫び、悲しみに暮れる。

855

850

845

840

さて、王は隨行者たちの許へ戻つた。

みなは事の成り行きを知つていたが、

この裏切者のことを大變に怖れていた

何しろ自分たちの王であり主君だつたから

この件について一言も口に出せなかつた。

こうしてあえて黙つていたのは

主人のためというより、恐怖ゆえだつた。

しかし、テレウスは愚かな失敗をした、

というのは、フィロメーナの傍に

見張り役として身分の低い女を一人置いたが、

この女は仕事で自活していて、

糸を紡ぎ、織る術を心得ており、

娘がひとりいて、その娘に

自分の技術を教えていた。

テレウスがこの女を見張役にしたのはまずかつた

なぜならこの仕事を命じたとき、

なすべきことをすべて指示して、

テレウスが彼女に念押ししたのは

とにかくこの乙女から

決して目を離さぬこと――

たとえどんな所用があろうと

何事が起きようともだ、と。

880

875

870

865

860

女は誓い、テレウスは女を信用する。

ここでテレウスはその場を去り

それ以上とどまるつもりはなくて、

自分の国、トラキアの都へ戻った。

プログネは、本当に

妹も一緒だと思ひこんでいた。

だから大いに喜んで出迎えたのだが

その喜びはたちまち萎んだ、

というのも、すぐ目のあたりにしたのは

主人とその随行者たちだけで

妹の姿は見えなかつたからである。

せっかく妹と大いに喜びあえると思つてたのに――

耳に入ることとは何一つ楽しくないし、

返事をする気にもなれやしないわ――

《ようこそお帰り》とも《神さまのお蔭》とも、

ただ、みんなに挨拶の言葉をかけられると、

まるでおびえたように、訊ねるのだ――

《妹はどこ？ なぜ来ないの？》

いま何してるの？ 誰に引止められてるの？

なぜこんなに待たせるの？

どこに、いつ、足止めされてるの？

いったい妹をどこに、置いてきたの？》

卑劣な夫は、うつむいて

900

895

890

885

いかにも悲しみにくれている

男というようなふりをして、

いかにももつともらしく

あからさまにみせかけの溜め息をついてみせる

――嘘を信じこませるために。

《奥方よ、まったく本当だよな、

どうにもできないことは、

わりやり諦めねばならぬというのは》

《それはそうね。でもなぜそんなことを仰有るの？

妹は来ない、ということね》

来ないんだ、本当に。来ていないのだ》

《どんな不都合があつたの？》

《どんな？ 奥方よ、とても言えない》

《なぜ？》《なぜでも》《ではわたしが

海をこえて連れに行く。おいやでなければ》

《奥方よ、落ち着いておくれ、

本当のことを言おう、

そなたが知りたいと申すのだから、

でも、できれば、言いたくなかつたのだ、

仕方ない、告白せねばならぬ、

それが良い事でも、悪いことでも》

ここでまた、偽りの溜め息をつき、

自分の言葉に本当らしさを添えるため

925

920

915

910

905

目から涙を流しはじめた——

『狐物語』の狐もどきに。

《奥方よ、どう言えばよいかわからぬ、

できれば言いたくないのでな、

そなたが悲嘆にくれるにちがいないことを。

そなたもわかってくれるであろう——

ほんの些細なことでも涙を流さずにいられぬ私が、

こんなに悲しみにひしがれているのは

余程のことであろう、と。

もしそなたがこのことを知ったら

どんなに悲しむことかと、それがつらい。

しかし、隠しても何の役にもたぬ

ただ、口に出すのがあまりにつらくて

言葉にならぬばかりなのだ。》

こう言うと、また溜め息をつくが

心には何の悲しみも抱いてはいない。

そして、溜め息をつき終ると、

かねて考えておいた言葉を口にした——

《奥方よ、いよいよ、

悪い話をする時が来た。

よいか、そなたの妹は死んだ。》

《妹が死んだ？》《ああ！ 何てことでしよう！》

《そう、本当だ。これ以上隠す理由はない。

950

とにかく、気持を鎮めてくれ、

大切なものを失ったときは

あまり悲しすぎたり苦しすぎてはいけない。

死神は誰をも意のままにする

善い者も悪い者も、逃れることはできぬ。

これは私たちみなが死神に借りていて、

誰もが支払わねばならぬもの

その時は遠からずやってきて

これが定めであるからには

死神はおのれの権利を行使して

そなたの妹を回収して行ったのだ

だから、あまり悲しすぎたり

そのように悲嘆に耽りすぎてはいけない

誰の身にも必ず起こることなれば。》

このように、卑劣な暴君は

胆汁に蜜をこきまぜて、

さきほど計略により酷い苦味を

味わわせた妻の心の傷の

苦しみをやわらげ

怒りや痛みをうすめようと思つたのだ。

しかし、どんなに慰めてみても

妻の心を力づけることはできない

なぜなら、殆ど、気も狂わんばかりだったから。

970

965

960

955



およそあらゆる怖ろしいもの  
最も醜悪なものたちの盟主であった。  
火は、プログネの命じた通り、  
ただちに点火され、燃え上がった

1020

この神の祭壇の前に

そしていよいよ盛んに煙が上がるように

1025

——これが慣わしになっていた——

牛が運ばれ、火に架けられた。

そこでプログネは、神々への

誓約・誓言を行った——これから毎年

祭壇の前で供犠を行う旨を。

1030

妹の魂が、地獄においても

尊厳を失うことなく保たれ、

喜びと平安が得られるように祈ったのである。

生贄いけにえの肉も骨もすべて燃え

何一つ残ることなく

1035

一切が灰か燼おびになってしまおうと

プログネはその上に血を撒きちらした

その後、できるだけきれいに

すべてを一個の壺に納め

それを地中に埋めて、その上に

灰褐色の大理石の蓋をのせた。

1040

蓋が載せられると、

その四隅のうちの一つに、  
見るも醜悪な像が置かれたが  
これは何をあらわすかといううと

1045

地獄で燃える魂たちや

その魂たちを護る悪魔たちを

司つかさどる者の似姿として造られたのである。

それから、墓石おもての表、像の前に、

かれらの言語により、

鮮明な字でこう刻まれた——

1050

《地獄の王にして君主、

ブルートーよ、憐れみたまえ、

この者の魂を——そのために私は

この供犠と典礼を行いました

1055

——たといこの者の肉体は何処にもあれ》

このように、深い敬虔の念をこめて

プログネは全身全霊を

供犠の実行に集中し、

妹の魂を、いまは不在の場所から

何とかして救い出そうとしたのだった……

1060

じつはフィロメーナは生きていて、

しかしその日々は苦しみにみち

しかもその苦痛は、卑劣な裏切者の

1065

狂おしい愛慾のために

日々新たになつていったのだが。

まったく彼女の、極度の嫌悪の種は

自分を裏切つた男によつて、力づくで

暴虐を恣にされることだつた。

乙女には大いなる救援が必要で、

できることなら、姉が、この窮状を

知つてくれたらと只管願うばかり。

けれど、どうすれば姉に知らせられるか、

その方法が思いつけないのだ。

とにかく、伝言をたのむ相手もなければ、

口をきくこともできない身である。

たとい使いに行つてくれる人があつても

その人に心の中を、どうやって

伝えることができようか!?

それにまた、こんなに監視されていて、

この家から外へ出ることなど、

許されるはずも、機会もないのである

《どうやって? 何のために? 誰が?》

——誰が? 監視している農婦は

テレウスにそう言いつけられている、

何度も何度も、その眼をかすめて

出られないかと……しかし機会はなかつた。

こんな状態で長い時が過ぎた後、

ついにフィロメーナは思いついた——

(これは必要が教えたのだ)

この家には、幾杵もの糸があつて、

老女とその娘が、四六時中、

それで織物の仕事をしており、

つづれ織りを作る道具が

何から何までそろつていゝではないか。

そこでフィロメーナが思いついたのは、

この手を使えば確実に

自分の受けた災禍のすべてを

姉に詳しく知らせることができると!

思いついた以上、ぐずぐずできない

すぐに仕事にかかるとしよう。

一つの箱の所へ行つて、開けてみると、

中にはあの農婦が置いたままの

糸杵と糸巻が入つていた。

フィロメーナはそれを手に取り、カラカラと操つて

慎重に、よく考えながら

的確に、仕事を開始した。

老女は、異を唱えたりせず

よろこんで手を藉してくれて、

この仕事にはなくてはならないと

彼女が思つたものならば、

1090

1070

1075

1080

1085

1095

1100

1105

1110

何でもあちこちに手を尽して探させ、  
取り寄せてくれたのである。

ついに、藍の糸や赤い糸、

黄色や緑の糸も、ふんだんに。

それでいて、乙女が何を織っているのか、

老女は何も知らず、わかりもせず、

ただ美しいものが出来て行くと、

それも大変にむつかしい仕事をと驚いていた。

というのも、フィロメーナは、まず

端の方から織って行ったからだ。

その次に船の形が織られたが、

それはテレウスが海を渡って、

アテネへ乙女を連れに来た場面。

それから、アテネへ来たときに

どんなふうにもふるまったか、

そして、フィロメーナを連れ出して、

暴力で犯した事の次第、

さらに、ここへ置き去りにするに際して

舌が切り取られたなりゆき。

これらすべてを綴れ織りに表現したのだ、

あの廃屋も、荒れ森も、

自分が閉じこめられた時の通りに。

こうして、見たまま体験したままを

すっかり織り終えてしまったとき、

もし誰か、この織物を姉のところへ

届けてくれる人が見付かっていたら

フィロメーナとしても、悲しみや苦惱を

大いに慰められたことであろうが。

けれど、一体誰に託したらいいのか、

お目付役の農婦は持つて行ってくれまいし、

その娘を使いに出してくれるとも思えないし、

ここにいるのは自分を入れて三人だけ、

フィロメーナはこうして六ヶ月、

全くそこに閉じこもったまま過ごした。

そしてついに、必要に衝き動かされて、

新しい兆候に気付き、

確信を得るにいたった——

お目付け役の老女が、乙女の言うことを

よく理解し、何でも聞き届けてくれるのだ！

とにかく、異を立てることがない、

大きなことでも、ささいなことでも、

ただ一つ、外へ出ることを除けば。

これは充分に根拠のあることだった、

つまりそれを、王が乙女に禁じたからだ。

乙女はこれまで忍耐し、待ったあげく

ついにこの牢獄から、

助かる希望を見付けたと思った。

ある日、老女とともに、

その家の窓辺にいた。

その窓にも、戸口にも

それまで一度も来たことがなかった。

——あのテレウスに、ひどい暴虐をふるわれ  
そのままここに閉じこめられて以来。

いま、窓辺にもたれて、

ささやかな喜びを感じていると

木立と川の間を通して

姉の住んでいる都が見えた。

そのときフィロメーナは激しく泣き出した、

自分の悲惨な状態に、

何の慰めも持てないのが辛くて。

もしも、お目付役の老女が、乙女を

力づけてやるすべを心得ていたら

喜んでいろいろ言ってくれたであろうに、

というのも、何て可哀そうな娘さんだろう、

こんなひどく悲しがつている、

どんなことを願っているにせよ、

ここから出ること以外なら

今すぐにでも、したいことを

させてやりたいかと思っていたのである。

1160

フィロメーナは、これまでの観察から、  
老女が何でも自分の望みをかなえてくれる  
と、気がついていたら、

いまその機会が訪れたと見てとると、

自分の編んだタピスリーを

取りに行き、それからきびすを返して

老女の待っているところへ戻ってきた

老女はもう乙女の身ぶり手ぶりを読み取って

思い違いをすることは決してなく、

口から出た言葉を聞くのと殆ど同じに

よく理解するようになっていた。

フィロメーナは近づいて、相手にさわり、

身ぶり手ぶりで、どうか娘さんを

あそこに見える町まで行かせ、

娘さんの手から、この織物を

王妃さまに差上げて——と頼んだ。

老女は乙女の望みをすべて理解したが、

その望みをかなえてやることについては

何の心配もせず、

すぐにしてあげない理由など何もない

なぜなら、何もかも善意に理解して、

思うには、これほどの美事な仕事に

それなりの代償がもらえるものと期待して

1165

1190

1170

1195

1175

1200

1180

これを王妃様に贈りたいというのは  
まったく当然なことではある、と。

1205

老女は、こう考えたと、どうしても  
フィロメーナの望みをすべてかなえてやりたい。

一方、乙女の方は、それまでのように  
怒りや苦悩にふさぐことが少くなり、

1210

むしろ大きな希望を抱くようになった——  
これから、姉が事の真相を知ったなら

きつとわたしを救い出しに来る、と。  
それが、もう、待ち切れなくなってきた、  
つまり、ことわざにも言っている、

1215

事を一挙に進めることが可能なのに、  
なおためらって先延ばしするのは愚かだ、と。  
しかし、このことだけは気をつけた——

ぐずぐずしてはられないわ、

いまこそ、事を成功させられるからには、と。  
老女の方は何も心配していなかった

1220

彼女には何の不都合もなかったからだ。  
《娘よ、よくおきき、いい子だからね、

この仕事をやって頂戴

王妃様のところへ、この織物を  
持って行って、差し上げること。

1225

終つたら、ぐずぐずせずに、戻っておいで

急いで行って、すぐ帰って来るのよ》

このとき初めてフィロメーナは泣き止んだ。

若い娘が織物を持って行くのを見て

やっとな、今に救いの手が来る、

1230

そう思うと、元気が出てきたのである。  
娘は急いで出発し、

一度も立ち止まったりせずに

王妃のところまでやって来て、

織物を差し出すと

1235

王妃はそれを開いて  
中を見ると、すぐ内容を理解したが、

自分の思いは素振りにも見せず、

泣いたりさわいだりしようとせずに、

1240

若い娘に立ち去るよう命じる。  
娘が帰って行くのを王妃は

付かず離れずに後を追ひ、

決して見失うことはなかった。

若い娘はそれには気づかぬまま

家まで帰り着いた。

1245

プログネは殆ど狂乱状態で

入口まで来ると、戸が閉まっている。

一言も言わず、声もかけずに

力まかせに足で戸を蹴った

老女は身じろぎもせず、

口をつぐんで、耳の聞こえぬふりをする

フィロメーナは大声をあげて、

姉のため戸を開けようと駆け寄るが

農婦も走って来て引き止めながら

恐怖でガタガタ顫えていると、

プログネは戸を叩き、身体をぶつけて

ついに扉をぶちこわす。

農婦はすっかり動転して、

扉がこわれるのを待たずに逃げ出し、

一室に閉じこもってしまった。

さあプログネは狂ったようにとびついて

中に入れるようになったと知ると

せい一ぱい大声で叫んだ——

《フィロメーナ、妹よ、どこにいるの？

おまえの姉さんだよ、もう大丈夫よ！》

そこでフィロメーナも飛ぶように

泣きながら姉に駆け寄り、

プログネも駆け寄って抱きしめる、

もうまるで正気を失っていた。

《妹よ、早くおいで、お前は

こんなところに、長居しすぎたわ、

お前の不運は、あの卑劣な男が

1250

わたしと結婚した日からはじまったのよ

あいつにお前はひどい仕打ちをされて

わたしに何も喋れなくなつたのね！

お前はここを出て行かなければ。

ここに足止めされすぎたのだから。》

そして二人は都へ向かった、

道々、嘆きあいながら、

人目のある街道や、路を避けて。

プログネはそつと、妹の手を引いて

誰も来ない部屋まで連れ込むと、

静かに二人で悲嘆に暮れ合った。

他には誰も居ず、二人きりだった。

プログネは泣いてかきくどく——

《妹よ、本当に悲しいことよね、

お前がこんなひどい目に合わされたのに、

こんなことをしてくれた卑劣漢に

どうやって復讐すればいいのかしら。

神様、お願いです、あいつに

あの卑劣さにふさわしい報いをお与え下さい！》

このとき、目の前に息子がやって来る、

それは世にも愛らしい子どもだった。

まさしくこれは不運の、

なせるわざではあったのだ。

1255

1260

1265

1270

1275

1280

1285

1290

1295

母親は息子が来たのを見て、

低い声で驚くべきことを口にした

それはまるで悪魔のささやきだった——

《ああ！ お前は何てよく似てるんだらう、

あの裏切り者、あの卑劣な悪魔に。

お前は、むごい死に方をせねばならぬ

父親の卑劣な行爲のために、ね。

父の卑劣さを、お前が償うのだよ、

父親のあやまちゆえにお前が死ぬのは

それはもちろん不当なことです、

ただね、わたしの見たところ、

神さまがお造りになったものの中で

お前ほどあいつに似たものはないのよ

だからわたしはお前の首を切りたいの》

子どもは駆け寄って母に抱きついた。

いまの言葉は何一つ聞いていなかった。

そしていかにも愛情こめて接吻したから、

プログネも思わず、今実行しかけていた

考えを、中止しなければならなかった

これは正義と自然の求めること、

およそすべての人間に当然のなりゆき。

愛憐の情は禁じているのだ、

母がわが子を殺したり、

その身体を切り刻んではならない、と。

けれど、王妃がまたしても

あの裏切り者、誓言破りを思い出したとき、

わが子に、もう大丈夫よと言う代りに

こう言ったのだ、どんなことになるうとも

この子の首を切り落して、

それを父親に食べさせてやるのだ、と。

そうすれば、妹に酷い傷を負わせた卑劣漢に

復讐することができる。

こうして、幼な子が愛情こめて

母親に抱きついているときに、

その母親が、悪魔にそそのかされるまま

悪魔の残忍さで

子どもの首を切り落したのだ——

そしてその首をフィロメーナに渡し、

二人は、一緒に、

上手に、しかし手早く調理して

その一部を焼肉ローストに、

残りをゆで肉にしたのである。

どちらも出来上がると

食事の時間になった。

プログネは、自分の意図がすべて、

達成されるのが待ち遠しくてたまらなかった

1320

1300

1305

1310

1315

1325

1330

1335

1340

何も気付かずにいる王を、  
迎えに行き、どうぞおいでになって、  
貴方が世界中で何よりも

1345

お好きだと思ふものを作りました  
召し上がってね、と誘いかけ、  
お附きの者も給仕係の騎士も  
邪魔にならぬよう遠ざけて  
二人きりになるようにした。

1350

自分ひとり、王もひとり、  
何もかもわたくしがお給仕します。  
王は、行くよと答えて、

1375

しかし息子も一緒だろうね、  
他には誰も、客は要らぬ

1355

私とそなたと息子以外には。  
《もちろん、あの子も一緒です、  
と、プログネは言う、わたしも賛成です。  
わたくしたちは、三人だけ。

1380

他には誰も来ませんし、

1360

誰にも知られたくないのです、  
わたくしたちがどこへ行ったかを。

さあ、参りましょう、仕度は出来てるわ、  
何もかも、すっかり、ね。

貴方も喜んで食べて下さるわ。》

1365

このようにプログネは真実を告げたが、  
夫の方は、どんなものを食べると  
妻が言うのか、理解できなかつた。

もちろん妻が相手に、自分の子を  
食べさせるなどと言うはずがない！

1370

テレウスは、かまわずに先を急ぐ、  
何かいやな事が起こるなどと思ひもよらぬ。  
プログネは王を導いて席に案内する  
いかにも陽気に、くつろいで

食事がたのしめるように。

王は、妻のもてなしぶりに大満足だ。

プログネは、王を席に着かせた。

食卓イェイツ布は、まっさらで、まっ白だ。

イティスの、腰の肉を持って来る。

王は肉を切り、食べたり飲んだりして、  
これは何か、と訊ねる。

《奥方よ、と王は言う、イティスは何処だ？  
そなたはさつき、約束したではないか、  
あの子もわれわれと一緒にだ、と。》

《あなた、すぐおわかりになりますわ、  
とプログネは言う、あの子のことはご心配なく。  
イティスはここから遠くない所にいます  
今いなくても、じき来るでしょう

1385

そんなにお待たせはいたしません》  
そこへ焼肉が運ばれて来る。

しかしテレウスは、妻をせき立てる、  
肉を切っては食べながら、  
息子を呼びに行くがいい、と。

《奥方よ、よくないぞ、そなたは。

約束を守らず、イテイスを来させぬとは。

あの子が来ぬのが、とても気になる。

私が、迎えに行かねばならんな。

他の誰かを使いに出すこともできぬし、

あの子の顔が見られぬのは不愉快だ。

はやく行って、連れて来い！》

プログネはもう、これ以上、夫に

何を食べさせているか、隠せなくなつて、

もうじつにあらさまにこう言った――

《ご注文のものは、あなたの中よ、

でも、全部ではありません、

一部分が、あなたの身体の中に、

他の部分は、外にあるのです》

フィロメーナは、この時まで

隣の部屋に隠れていたが、

頭部をまるごと持つてとび出した。

まっすぐ王の前まで来ると、

1390

ぼたぼた血の雫のたれているままの  
その頭を、王の顔のまん中に投げつけた。  
テレウスは裏切られたことを知って  
しばし茫然となり、  
受けた苦痛と屈辱で

身じろぎもせず、一言も物を言わなかった。

屈辱感は、当然のことながら、

それが息子の首だとわかったときであり、

そのために、王の血は濁流となり

怒りと苦惱が倍加したのは、

他ならぬプログネが、それを

自分に食べさせたと知ったからである。

大いなる屈辱と苦しみを感じ、

そして恥辱に顔色が変わっていたのだが、

フィロメーナの姿を見たとき、

恥辱感はたちまち消え失せた。

息子の死に、復讐しなくなったからだ。

そこで、二人の姉妹は死の危険に曝さらされたが

二人にとつてそれはもうどうでもよいことだ、

テレウスは激しく立ち上がり

食卓を蹴ったから、その上のもものは

すべて床に散乱した。

何もかもひっくり返し、まき散らすと

1410

1430

1400

1425

1395

1420

1415

壁に吊してある劍に目をとめ、  
それを取ろうと走り寄る。  
1435

姉妹はもう、それを待たずに  
逃げ出したが、王は追いつがり、  
殺してやるぞと、劍をふりかざす  
怒りにかられるままに

出口の扉で姉妹を  
狩り立て追いつめた。  
1440

そのとき、運命なるものの企みにより  
大いなる奇蹟(ミラクル)が起こったのであった。  
こんなことは、誰方(どなた)も聞いたことがなからう  
すなわちテレウスは一羽の鳥に、それも汚く、  
おぞましくもみにくい小禽(コウ)になった、

——その手から劍は落ちて——  
冠毛(トシカ)のあるヤツガシラになった、と。

これは、物語の語るところでは  
かれが乙女に対して犯した罪と  
恥辱のためであると言う。  
1450

プログネはツバメとなり、  
フィロメーナはサヨナキドリになった。  
今日でもまだ、彼女の歌によれば、  
次のような輩(やから)はみな恥辱にまみれて  
罪と破滅を迎えるべきだ——

1455

卑劣なる者、誓いを破る者  
人の喜びを無視する者

およそ不実な行為や、  
卑劣な行い、裏切り行為を、  
賢くて礼節ある乙女に加える者は、と。  
1460

つまり、そんなやからを苦しめるために  
この鳥は、春になり

冬がすっかり過ぎ去ったとき、  
乙女の憎む悪者どもに向かつて

できるかぎりのやさしい声で歌うのだ、  
森のそこかしこで《殺せ！ 殺せ！》と。  
1465

ここで、私は『フィロメーナ』を終ろう。  
1468

訳注(つづき)  
〔凡例〕(再掲)

訳注

〔凡例〕

一、各項冒頭に、訳注通し番号、次に物語本文の行番号、そして項目、注記の順。

一、略記として次のものを用いる。

才変——オウイデイウス『変身物語』

才教——『オウイデイウス教訓集』

ド・プーレ——C. de Boer (ed.) *Philomena, conte racod, après Ovide*. Paris 1907 [Slakine Reprints 1974]

A B——Anne Berthelot (ed.) *Philomena in Œuvres complètes de Chrétien de Troyes*. (Bibliothèque de la Pléiade)

E B——Emmanuèle Baumgartner (ed.) *Philomena in Pyrame et Thisbé*. Narcisse. *Philomena*. (Folio classique)

Pyrame et Thisbé. Narcisse. *Philomena*. (Folio classique)

(20)

765 《美しいひとよ——以下の宮廷風、まがいの口説きと、フィロメーナの対応のやりとりは、才変になし。才変では、いきなりレイブシーンに入る。

(21)

855 856 乙女の舌を(…)切断する——才変では、(21)で蛇の尾が切断されてなおピクピク動くイメージを喩に用いているが、クレティアンは、そういうおぞましいシーンを用

意避して、この比喩をカットしている (E B 注)

(22)

869 身分の低い女——une yvaine 自己自体、多義的な語で、本篇でも、「農婦」「老女」他の意に、代るがわる利用されている。

(23)

900 妹はどこ？ なぜ来ないの——この後から94行まで、テレウスが妻の妹の死という作り話をする六十余行のくだりは、才変ではわずか二、三行である。その後の、プログネが死神を非難する数十行も、才変にはなく、すべてクレティアンによる補筆。

(24)

929 『狐物語』の狐もどきに——par renarde. 『狐物語』の最初期枝篇が書かれたのは、リュシアン・フルーによれば一七五五年頃から一八〇五年頃の間に推定されている (鈴木・福本・原野訳『狐物語』白水社刊、485頁)。これに対して『フィロメーナ』の成立は、一七〇年代初め頃だとすると、この一行は、クレティアンの原作にすでにあった通りか、後人の補筆かが問題になる。(おそらく後者であろう)

(25)

1011 犠牲——sacrifice 以下の供犠行為のくだりは、才変にはない。

(25 bis)

1131 すべてを綴れ織りに表現——Tot or escrit an la corinne 舌を切除されて人に語るすべを失った乙女が事の次第を姉に伝えるため織物に絵物語を織り込むというアイデアは才変でも同じく用いられていることについては、注(12)を参照。さらに、マリ・ド・フランスの『レー』Marie de France *Lais* の一篇「サヨナキドリ *Laurisac*」で、筋立ては全く異なりながら、嫉妬深い夫が、妻の言い訳に使われた《サヨナキドリ》を捕えて殺害したのを、妻が

絵物語に仕立てて恋人に伝えるくだりがある。その典拠をオウイディウスの変身物語の、ピロメラの話に見る向きがあることは知られているが、最近の研究 (J. H. McCash, 2006) は、クレティアンの『フィロメーナ』とマリの『ラユースティック』とがいずれも才変を共通材源としていると見るのみならず、クレティアンのテクストはマリ・ド・フランス作品のいわゆるトリビュートであるという読解を提示している。いずれにしても、この三つのテクストは、十三世紀の『アルチュール王の死』における、グニエールとランスロの恋のいきさつをランスロの描いた絵物語を見て王が悟る場面(白水社版『フランス中世文学集4』所収の拙訳66頁以下)などを含めて、古典古代から中世文学に相渉るインターテクステュアリティの、網目の中で考察することができる。

(26)

1442 ~ 1443 運命なるものの企らみにより (...) 奇蹟が——  
con plot as destines/Avint une si grant merveille すなわち

姉妹と王の三者の「鳥への変身」を「運命による奇蹟」に帰するというこの箇所は、中世作家クレティアンならではの論理であり、古典古代の作家たちが「神が哀れをもよおした結果(ヒュギーヌス)」、「ゼウスがパンクレオースをあわれみ」(アントーニース・リーベラーリス)、「姉妹が神々に祈った結果」(アポドロロス)を経て、才変の、理由・原因を故意に言わない「姉妹は逃げるうちに鳥になり」「テレウスは悲しみと復讐心から (...) 鳥になった」という、ただ、あたかも当然のなりゆきを語るだけの記述から一步を進めて、奇蹟を起こした主体を運命という抽象概念(ここでは中世に常套的だった人格神「運命の女神」)を示唆せ

(27)

1452 プログネはツバメになり——Progne devint une

arondele この姉妹の変身については、才変では《翼が生えて空を飛び》云々と、鳥になったことを示唆こそすれ、「ツバメに」「サヨナキドリに」という鳥名は明かされていない。この形が「サヨナキドリ」であることは、最終行に明示されている。従って、1454行以下の、変身したサヨナキドリの歌の意味を説くコーダの部分は、才変にはないのである。

ず、あえて複数名詞 *destines* を意味上の主体としている)に帰して、王や姉妹の、レイプや、復讐のための子殺し、人肉食という、反宮廷倫理行為が自ら惹起した懲罰として、読者に暗黙裡に訴えるという、中世騎士道文学作家らしい倫理的方法を確立しているとみることができる。この読解は、クリステイナ・ノアッコ『十二、十三世紀フランス文学における変身』(Noacco, 2008) p.78 ~ 80の示唆による。

## 『フィロメーナ』小論（訳者解説に代えて）

本篇の成立過程を年表的に記すならば、

西暦一世紀前半 オウイディウス『変身物語』

一七〇年頃 クレティアン、右の一部を基にして『フィロメーナ』を書く

十三世紀 『オウイディウス教訓本』

十九世紀末 G・パリスが右の中に『フィロメーナ』を発見

一九〇六年 G・ド・ブールが校訂本を刊行

二〇〇九～二〇一〇年 日本語訳、『言語文化』に掲載

これをさらに大雑把に言いかえれば、約二千年前にローマでラテン語で書かれた物語の一部分が、その一千年後に北フランスで古仏語で自由訳され、それがまた約一千年後に極東で日本

語に訳される——ということなる。

言うまでもなく、文学的作品の成立と享受の諸相は、それぞれの時代や文化の状況と不可分であり、オウイディウスのテクストはさらにそれ以前の、ギリシャ・ローマ神話の何百年にわたる成立史を受け継ぎ、クレティアンのテクストは、かれ以前の何百年間に成立したフランス語フランス文学の、一種のクレオール的な展開の結実である。

とすれば、この間の社会経済的、文芸思潮上の背景等に立ち入って考察することは、時間的にもスペース的にも、ここはその場合でない。

如上の条件に鑑みて、本稿ではもっと通時的かつ普遍的な意味での、私たちの文明にとって（『フィロメーナ』は何か——を論じたい。

おそらく（私にとつてそうであったから推測するのだが）この物語は、現代の読者にとつて、衝撃的であろう。おそらくフランス中世の読者にとつてもそうであったと考える。

この作品の与える衝撃の、根幹は何か。

ビブリオグラフィの「一」をごらんになると、クレティアンのテクストの英訳を含むC・レイモンによる対訳本の題名に『オウイディウス由来の三つの愛の物語』とあるが、本篇を（愛の物語）という一語で括るのはいかにも躊躇われるし、それなら別の研究者の意見をきいて、たとえば端的に（レイプ・傷害・人肉喰食譚）とも称すればよいか（R. L. Krueger, 2005）とい

うと、それでは、ひたすら人間のおぞましさに焦点を合わせた物語のようで、クレティアンという中世騎士道ロマンス作家らしい表現の新鮮さ、上品さ、雅趣のあるストーリー展開をあまりに無視したレットテル貼りである。

あらためて思い返せば、本篇が私たちに与える衝撃の契機は、一に懸<sup>か</sup>つて、第一二三六行の、プログネが妹からの織物を開いてただちに真相を悟ったときからの、あたかも一瀉千里といふべき百数十行——復讐心を沸<sup>たぎ</sup>らせて次々にその実現へと行動に移し、さすがに子殺しの直前には一瞬の躊躇はあるものの、ただちにそれをのりこえて、ついに姉妹と王と三者三様の復讐の実行のすえ、《奇蹟》にいたる、終結部の展開ぶりにある。そこで本稿もまた、物語全体へのレットテル貼りの問題を思いわずらうことはわきへ置いて、この終結部に焦点を合わせたい。

三者三様の——というのも、この三人をそれぞれカタストロフへと追い詰める《復讐心》は、決して一様ではない。

まずテレウスは、物語の初めから《卑劣な暴君》(11行)と称<sup>な</sup>ばれていた——あたかもこの人物こそ、災禍の元凶であると言いたげに。実際は、導入部でこの王が悪しきまに紹介される<sup>ゆえん</sup>となのだ。これは、終結部でこの男が勃然と《復讐心》にかられるのが、三人のうちいちばん後であることに照応している。また、導入のきつかけが、姉プログネがこの男の妃となっていること(6〜7行)の記述なのも、終結部でプログネが妹に、

お前の不運はあの男とあたしの結婚からはじまったと言う所に  
対応している。

プログネの復讐心は、王の、妹に対する非道な行為に、フィロメーナのは、自分に対する王の非道な仕打ちに、そして王の復讐心は女たちによる、息子の死とその死体を知らぬ間に啜食させられたことに対してであるが、それは具体的には、最後にフィロメーナの姿を見たとき(145行)になって初めて、勃然と湧き起こった。以上を要するに、三者三様の、三通りの復讐心が、まるで蛇のようにからみあって、今にも、一場の修羅場面をもたらそうとする。

そして物語による判決は、運命のごとく自然に、三者の、鳥への変身という奇跡。

このような奇跡・変身を、神々の意志によるとする神話的解釈(ヒュギュヌス他。訳注26を参照)は、すでに、オウイディウスのテクストにおいて、表面から消去されていた。これをさらに引き継ぎ、一歩を進めたクレティアンという十二世紀ルネサンスの詩人の真意は、私の考えでは、復讐による死刑執行(という名の殺人)の否定である。物語は、夫への復讐のために夫との間に生まれた幼児を殺して食品化した姉(と妹)を殺さず、その姉妹を今にも斬殺しようとした王の復讐行為を阻止するためにもその直前に王を殺すこともせず、ただ、三者を鳥に変身させた——おそらく二度と、生きてある限り免除されることのない変身に。

現在、二十世紀から二十一世紀にかけて、人間文明社会は、死刑廃止に向かう趨勢にあるが、日本をはじめとして、いまだに死刑存続論の優勢な国や州も少なくない。およそ復讐心へのオブセッションを淵源とする〈死刑〉〈戦争〉そして〈核兵器〉の廃止・廃絶は、人間文明を衰亡から救う重要なステップであること、そしてそのためには、恐るべき〈極悪人〉をも、ただ死刑を免除して無期懲役や終身刑にするのではなくて、鳥に変身させ、死ぬまで鳥としてでも生を全うさせ、ただ、鳥語で「殺せ殺せ」と叫ばせるにとどまるべし——これが『フィロメーナ』の結論であり、降参した敵は殺さない騎士道的精神規範(シヨルジュ・バタイユ——G. Barailie, 1949)の真意である。

### 《ピリオケラフィー》

一、物語本文(すでにIの《解題》に掲出のものであるが、誤りを正し、補記を加えて再掲する)

Chrétien de Troyes - *Philomena*. Conte raconté d'après Ovide. Avec introduction, notes, index de toutes les formes et appendices, par C. de Boer, SLATKINE Reprints, 1974 (Réimpression de l'édition de Paris, 1909)

本書の付録(アペンディイス)には、オ変の原文 v. 426-674が、韻文形のまま収められているので便利。(BN所蔵の写本 Fonds latin 8008.の校訂本文、脚注付)他にオ教の

introductionも収めてある。

Chrétien de Troyes, *Œuvres complètes*. Gallimard, 1994 «Bibliothèque de la Pléiade» p.917-952. *Philomena*. éd. et notice par Anne Berthelot.

本文は上段に現代語訳、下段に原文。A Bによる notice は p.1391-1410.

Pyrame et Thisbé. Narcisse. *Philomena*. Trois contes du XIIe siècle français imités d'Ovide. Présentés, édités et traduits par Ermannuile Baumgartner, p.195 sq. *Philomena*. Gallimard, 2000 «folio classique»

本文は左頁に原文、右頁に現代語訳の対訳形式。E Bによる Notice は p.273-279. さらに p.293以下に、オ変のテクスト v.426-674の現代フランス語訳が収められている。

Chrétien de Troyes, *Romans*. Librairie Générale Française, 1994. «La Rochelotique» p.1225 sq. *Philomena*. Ed de C. de Boer, traduction d'Olivier Collet

右の四点の他、次のものがあるが、未見——

Cormier Raymond ed. and tans - *Three Outlines Tales of Love* (Pyramus et Thisbé, Narcissus et Dané and Philomena et Procné). Garland Library of Medieval Literature. A26 New York, London, Garland, 1986

二、研究書・論文等(BBSIA旧号等を参照して、未見のものも加えた)

BBSIAは一九四八年以来刊行されている国際アーサー王学会の年刊文献情報誌「Bulletin Bibliographique de la Société Internationale Arthurienne」の略号。ちなみにこの情報誌の網羅的・コメント付文献目録を範として、私たちの宮沢賢治

- 学会イーハトーブセンターの年刊研究誌のビブリオメトリック  
 ーは成立したのじやね。
- Frappier, Jean - *Chrétien de Troyes* «connaissance des Lettres», Hatier, 1957, pp66~71
- Ajro, Anna, "Tessitrice di parole (*Philoмена, Firenze*...)" in Il racconto nel Medioevo romanzo. Atti del Convegno, Bologna, 23-24 ottobre 2000, *QERB*, 15 (2002), 181-195
- Noacco, Cristina - *La metamorfose dans la littérature française des XII<sup>e</sup> et XIII<sup>e</sup> siècles*, Presses universitaires de Rennes, 2008
- Ueltschi, Karin "La *Mesnie Helleguin* en conte et en rime", Honoré Champion, 2008
- Bataille, Georges - «La littérature française du Moyen Age — la morale chevaleresque et la passion», *Critique*, no.38, juillet 1949 (*Œuvres complètes*, t. xl)
- G. Sansone et H. Williams - «Crestiens, li Gois» *BBSIA*, 1958, p.67 ~ 71
- CORMIER, R. J., «The gift of tears in Chrétien's "Philoмена"» in Beiträge zum romanischen Mittelalter, hgg. von K. Baldinger, Tübingen, 1977, pp.193-7
- Owen, D. D. R., «Theme and Variations: Sexual Aggression in Chrétien de Troyes» *FMLS*, XXI, 1985, pp376~386
- Benkov, Edith Joyce, «Huginus' contribution to Chrétien's *Philoмена*», *RPh*, XXXV (1982-83) 403~406
- Pfeffer, Wendy, «The Change of Philomel: The Nightingale in Medieval Literature», American University Studies, ser.3: Comparative Literature, 14 (New York, Bern, Frankfurt: P Lang, 1985)
- Schulze-Busacker, Elisabeth. «*Philoмена*. Une revision de l'artribution de l'œuvre», *Rom*, t.107, 1986, pp.459-485
- Sansone, Giuseppe E., «Chrétien de Troyes e Chrétien li Gois. un consumo» *SMV* XXXIII, 1987, pp.117-134
- Cornier, Raymond J., «Térée, le pêcheur fatal dans *Philoмена* de Chrétien de Troyes». *Dfs*, XXIV, 1993, p.1-9
- Coolput, Colere-Anne van, «Auto-portraits de héros» in *Conjunctures* 1995, pp.97~111
- Alexandre-Bidon, Daniele «Une foi en deux ou trois dimension? Images et objets du faire-avoir à l'usage de laïcs», *Annales E. S. C.* 1998, no.6, pp.1155~90
- Jones, Nancy A. «The Daughter's Text and the Thread of Lineage in Old French *Philoмена*», in *Representing Rape in Medieval and Early Modern Literature*, ed. Elisabeth Robertson and Christine M. Rose. Basingstoke and New-York: Palgrave, 2001, pp.161-87
- Basingstoke and New-York: Palgrave, 2001, pp.161-87
- Krueger, Roberta L., «*Philoмена*: Brutal Transitions and Country Transformations in Chrétien's Old French Translation» in *A Companion to Chrétien de Troyes*, ed. Norris J. Lacy and J. T. Grimbirt. Cambridge: D. S. Brewer, 2005, pp.87~102 *Arthurian Studies*, 63
- Les Lais de Marie de France, publié par Jean Rychnert: Champion, 1977.
- 三 邦語参考文献(才変その他、本篇関係説話のものに限った)  
 オウイディウス『転身物語』田中秀史・前田敬作訳、人文書院  
 一九六六  
 オウイディウス『変身物語』上下、中村善也訳、岩波文庫、  
 一九八一~四  
 ホメロス『オデュッセイア』上下、松平千秋訳、岩波文庫、

一九九四

ヒュギーヌス『ギリシヤ神話集』松田治・青山照男訳、講談社  
学術文庫、二〇〇五

アントーニーヌス・リーペラーリス『メタモルフォーシス（ギリシア変身物語集）』安村典子訳、講談社文芸文庫、二〇〇六

アポロドーロス『ギリシア神話』高津春繁訳、岩波文庫、

一九七八年改版。

マリ・ド・フランス『十二の恋の物語』月村辰雄訳、岩波文庫、

一九八八